



シンポジウム『古代吉備の風景』 国際性をもち 輝いていた古代吉備

シンポジウム『古代吉備の風景』が11月3日、市民会館で開かれ、古代吉備の風景や朝鮮半島とのつながりをメインに、6人の研究者が多くの謎や歴史ロマンにあふれる古代吉備の姿に迫りました。

国民文化祭・おかやま2010で総社市の主催事業の一つとして開催された「シンポジウム『古代吉備の風景』」。会場は歴史ファンや市民らで満員になり、古代吉備の古墳群や経済力、朝鮮半島とのつながりなどについて考えました。

吉備文化の輝き

基調講演では、京都大学名誉教授の上田正昭さんが、「古代吉備の文化の輝き」と題して講演。特殊器台の分布状況や地域を支配する長官を指す「大宰」の記述から、

江の戦いの後、新羅とは友好的な関係に転じたとみられることから、日本の軍事強化のため鬼ノ城は築城されたと考えられている」と、上田さんは説きました。



基調講演をする上田正昭さん(京都大学名誉教授)

吉備の勢力が広い範囲に及び、大きな勢力であったことを説明。吉備の文化は朝鮮半島などの東アジアとのつながりのなかで輝き、独自性と国際性をもち合わせていたとしました。それを最も象徴するのが朝鮮式山城の鬼ノ城だとし、「7世紀後半、唐・新羅との白村

トは、奈良大学の亀田誠教授、岡山理科大学の亀田修一教授、大阪大学の武田佐知子教授、韓国の慶北大学の朴天秀教授の4人。出土品や鉄などの観点から見た朝鮮半島との関係、鬼ノ城、

観光などについて意見交換しました。

吉備のすゝさ

朝鮮半島との関係について、亀田さんは、「渡来人が地域に定着し、もって

た技術を使って世のなかを変えた」としました。また、「吉備の経済力を誇示するもの」の一つに鉄があり、6世紀には製鉄が可能になり、吉備にとっての鉄の存在は大きい」と話しました。

朴さんも、「吉備から出土した5、6世紀の土器を見ても、百済系、新羅系、加耶系とさまざままで、吉備は、畿内、九州に並ぶ地域だと分かる」と、スライドを使って説明しました。

武田さんは、古事記のなかに登場する吉備の児島の屯倉と呼ばれる施設を紹介し、「屯倉は物資の集散センターと位置づけられ、吉備の重要性が神話からもうかがわれる」としました。

たのではないかと考える」と話しました。上野さんは、港があり、吉備の中山を中心とした生産力の高い空間を統治する意味で鬼ノ城は重要だとし、「比較の観点を考えることで、古代吉備の風景がちがった形で見えるのでは」と話しました。

に、亀田さんは「遺跡のネットワーク化」、武田さんは「国際性のアピール」、上野さんは「人と人が交流する民際を」、朴さんは「歴史や文化、娯楽をセツトにして人を呼んでは」と

しました。神崎さんは、「多くの人に吉備に注目してもらい、たくさんの人からの意見と注目が必要」と締めくくりました。

問い合わせ

文化課文化振興係(☎0853491)



古代吉備の姿や朝鮮半島とのつながりについて意見交換

鬼ノ城を訪ね、百済の山城の印象を強くもったという朴さん。韓国で見えられた遺構を紹介し、「神籠石列石の上に版築を築いていた遺跡が朝鮮半島にもあり、これが日本に入ってきた

神崎さんは、「行ったり来たりと、吉備と朝鮮半島の交流は盛んだったが、大和が入ってくるにしたがい、吉備の影は薄くなりながらも、半島とのつながりはなお続いていた」とまとめました。



上野誠さん(奈良大学教授)



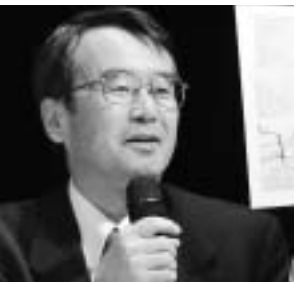
武田佐知子さん(大阪大学教授)



熱心に聴講する皆さん



コーディネーター 神崎宣武さん(民俗学者)



亀田修一さん(岡山理科大学教授)



朴天秀さん(慶北大学教授)



福山から望む総社平野